

芋の秋湧いて泪のふたみつぶ

藤田湘子

「芋の秋」とは、里芋畑の広がる風景や収穫の頃の季感を表す季語である。最近では、薩摩芋や馬鈴薯でも良さそうなものだが、縄文時代後期から日本に伝播していた里芋をイメージしなければならぬ。里芋畑の畦道を歩いた経験がなければ鑑賞も難しいだろう。

句集『一個』の十月二十日には、

芋の葉の大きな露の割れにけり 湘子

のごとく、より即物的で俳人好みの句もあるが、掲句の「泪のふたみつぶ」は見事としか言えない巧みさである。湘子が作句開始の十代から育んだ馬酔木の叙情性を、この八月作の「芋の秋」ではまだ捨てきれず、十月になりまた一段階上昇したと解釈すべきかもしれない。

1983年（558.08.26作）第六句集『一個』 鑑賞・轍郁摩